

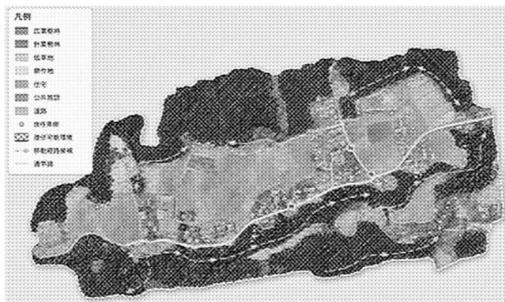
# 都、クマ対策に新興技術

## ドローンでマップ作り

### 多摩の中山間地集落

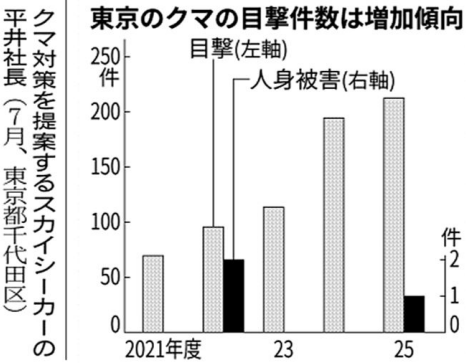
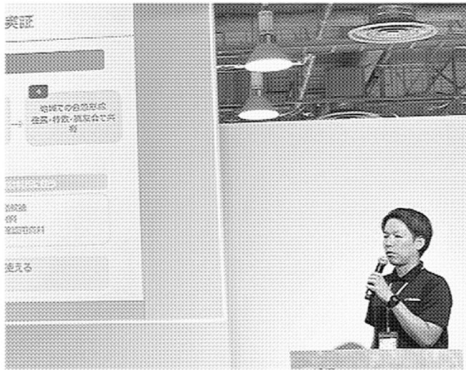
東京都はクマ対策にスタートアップの技術を採用する。出没が相次いだ多摩の中山間地の集落などをドローンで撮影し、クマを招く危険がある死角を見える化した地図を作成。やぶ刈りや放置果樹の除去の効果的な対策につなげる。都内でも出没が増加傾向にあるなか、被害を未然に防ぐ環境をつくる。

「クマが人間の生活圏に入りやすい環境をどう



スカイシーカーが提案する「クマ総合対策マップ」のイメージ

## 死角を見える化 やぶ刈り・注意喚起に活用



クマ対策を提案するスカイシーカーの平井社長（7月、東京都千代田区）

変えるかが重要だ」。ドローンのレンタル・販売を手がけるスカイシーカー（東京・千代田）の平井優次社長は7月、都が主催したビッチイベントでこう訴えた。同社は2015年の設立で、ドローンによる鳥獣被害対策を手がけてきた。

都は「最新の技術を活用した総合的なクマ対策」をテーマに、出没を抑えるための技術やサービスを募集した。都がサービスの仕様を細かく定めて入札にかけるのではなく、広くアイデアを募

った。書類選考をへてビッチイベントには6社が出場。審査の結果、スカイシーカーが優勝した。近く都と正式に契約を結ぶ。

まず集落をドローンのカメラで撮影して地図化し、クマの出没を招く耕作放棄地、農作物、放置果樹、生ゴミなどに印をつける。住宅や通学路など人との接点になりうる場所も図上に落とし込んで「クマ総合対策マップ」をつくる。3次元の地図も作成可能だ。出没が相次ぐ多摩西部の中山間地での作成を見込む。従来は人による調査だ

だったが、ドローンの活用で作業時間は10分の1になるという。地図をもとにやぶ刈りや放置果樹の除去を進めるほか、住民への説明や注意喚起に活用する。すでにシカやイノシシの農業被害対策で同様の実績がある。

平井社長は「クマが出てから騒ぐのではなく、出ない環境をつくる」と強調する。都自然環境部の関係部長も「人身被害を防ぐにはクマと自分たちの地域のことをよく知る必要がある」と話す。

出没時は捜索範囲の決定や移動経路の確保に地図を使うほか、自治体の判断で発砲を可能とする「緊急銃猟」検討時の安全確認用の資料にもなる。ドローンの赤外線カメラによるクマの生息域の調査も予定する。

都がクマ対策に本腰を入れるのは、都内での目撃件数が増えているからだ。25年度は213件と21年度の3倍になった。25年度の調査では都内の生息数は1200〜3780頭で、増加傾向にあるとみられている。

26年に入ってから5月と7月に、奥多摩町や檜原村の山林・登山道でツキノワグマによる人身被害が相次いで発生した。25年に比べて目撃件数に大きな増加はないものの、分布は従来の山間部から市街地に近い東側に広がってきているという。

住宅地と山の緩衝帯である中山間地は過疎化で農林業が衰退している。中山間地で人間の活動が減少し、出没が相次いでいる。クマを人の生活圏に寄せ付けない環境をつくっていくには、最新の技術を活用した対策が急務だ。

東京都は27年度、08年から禁じていたクマの狩猟を限定的に解禁する方針だ。期間は11月から2〜3カ月間とする。狩猟などによる捕獲数は34頭を目安にする。複数の対策を組み合わせて出没を抑止する。（田崎陸）